

都市の水辺遊びからつくる里川

筑波大学社会学系教授 鳥越 皓之

川の利用が、水をきれいにする

私の主張点としては、3 つあります。1 つは、住民による川の利用が、川の水をきれいにするということ。2 点目は、それは水をきれいにするだけではなく、地域社会そのものを豊かにすることという点です。そして、3 点目に、このようなプロセスを歩むと、所有の転換を引き起こす。以上 3 点についてお話ししたいと思います。

水を利用するということは、洗濯をするようなことであって、利用したら水がきれいになるというのは矛盾しています。ただ、理論的には矛盾しますが、現実にはそうではない方向に歩むということをお話ししたいと思います。

私は、たまたま日本の水環境行政の責任ある人と一緒に講演する機会があったのですが、その人が「水をきれいにするのを数十年かけてきたが、今できる技術でベストを尽くし、今の COD (化学的酸素要求量)などはきれいな状態だ。これ以上は手の打ちようがない。」と言われました。私は、びっくりしました。というのは、私が歩いているところには、水がきれいになってきている所があるのです。しかも、透明な水に変わっています。それは、何なのかということについてお話ししたいと思います。

今日の話は、里川が 1 つのキーワードで、もう 1 つはコンパクトシティです。これは、両方共「親しさ」ということですが、私はこの「親しさ」をもう一つ突き抜けて、「利用する」ということを考えないといけないのではないかと思います。

そこで、「利用」にポイントを置きながらお話をします。1 つ極端な例から話した方がイメージしやすいと思いますが、中米のグアテマラ共和国の代表的な湖であるサンチャゴアテトラン湖の朝の風景を見てみましょう。

サンチャゴアテトラン湖(グアテマラ)でみなぎ洗濯



日本でも「お婆さんが川に洗濯へ」という言い方がありますが、朝、一定の期間の間に、女性が湖で洗濯をしています。洗濯だけではなく、子供を裸にして水浴びさせたり、女性は体を洗ったりするので、私共男性は近づけません。望遠レンズで遠くから写真を撮りました。コルバンさんの話の中に、水とエロティシズムの話がありましたが、日本では、江戸時代に伝統的な行水の絵があり、女性が体を洗っている姿を若衆が覗き見をするというのと同じ形で撮った写真です。

洗濯をすることは川を汚すことなので良くないと言われていました。私は、講演をする機会があり、このグアテマラ共和国の首都でお話をしたのですが、「この人達はいい人たちだ」という話をしました。この人達はマヤ族の人たちですが、グアテマラの中心は、スペイン系の人たちが政権を握っています。都会の知識人たちは、このマヤ族の人たちをよくない人達だと思っています。つまり、私達は環境を守らなければいけないのにこの人たちは川に行き洗濯をして汚していると思っているわけです。

これは一言で言うと、日本の鉱山にいるカナリアみたいなもの、つまり、酸素が無くなるとカナリアが跳ねて酸素が無いぞとチェックして知らせてくれます。それと同じで、この人たちは水を利用しているのであって、彼らも汚したくないわけです。だから、ホテルが盛んになって汚れてきたり工場廃水があったりすると、この人たちは必ず反対運動を起こしてくれます。洗濯の汚れは、大きな湖からして見れば小さいことですが、それをチェックしてくれる人がいないということが、日本を含め世界のあちこちで起こった悲劇でありました。それを、チェックしてくれる人たちがいるということは、大変大きな意味を持つと思います。

利用すると生活が充実する

利用には、このような積極的な意味があるのですが、川の水質の保全や向上だけではなく、川の周辺の住民達の生活を充実させ、社会を充実させる機能を持つということを言いたいと思います。これは、コンパクトシティ論とおそらく関わってくるかと思います。

宝塚市御所下水路



宝塚市の御所下水路は、江戸時代の地図を見ると農業用水路として描かれており、近代化の中で、さほど計画なく住宅が建てられてきたところです。静かな住宅地ですが、住宅地の生活廃水がこの農業用水に流れ込むので、下水になっており臭い水になってしまったわけです。

ところが、自治会の役員の人たちが、よくあることですがコイをこの川に入れました。なぜかという、この川の横に武庫川という大きな川があるのですが、その川が最近の下水処理場の発達により少し

きれいになり、その水が入り込んでいる御所下水路も少しきれいになったからです。

コイを入れるアイデアは、そんなに珍しいことではありませんが、200匹くらいになったわけです。さて、何が起きたかという、この上流には工場があるのですが、工場の人たちはもし自分の排水をそのままストレートに流し込むと、コイが死んでしまうので犯人が突き止められてしまいます。それは、新聞に載ったらずいということで、工場廃水があまり流れなくなりました。

また、川の上の方には山がかかっており、住宅開発されています。住宅開発をすると、細かい砂粒が川に流れ込んできます。すると、魚のヒレに砂粒が入り込み、死んでしまうわけです。それは大変だということで、都市開発の人たちも躊躇してしまいました。

その結果、本来きれいになる以上に、どんどん川の水がきれいになり、緋鯉という観賞用のコイではなく、自然のコイがどんどん入り始めました。地元の人たちが、エサをあげたりしているので、自然のコイも極楽を見つけた感じです。また、コイだけではなく、ハヤという魚やいろいろな魚が増え始めました。つまり、自然の魚が増え始めたわけです。

こうなると、今まで関心のなかった子供たちが覗き込むようになり、大変関心を持ってくれるようになりました。また、朝早くお爺さんやお婆さんが散歩をするのですが、コイがいるのでこの御所下水路の周辺を散歩されるようになりました。そして、お年寄りには心遣いがやさしいので、周りに草花などを植えるようになり、きれいな場所になったわけです。

宝塚市はベットタウンですが、今までは、孫のおじいちゃん、おばあちゃんへの関心が弱かった。しかし、「コイがいるおじいちゃんやおばあちゃんの所に行きたい」と、孫がしょっちゅう来てくれるようになったことがうれしく、おじいちゃん、おばあちゃんは、「このコイだけは守らなければいけない」ということになり、守る人が増えてきました。そうすると、自治会が「この川の掃除をしたい」と言い始めました。ここは、農業用水路というもので、ガラス瓶や自転車などが投げ込まれていても、農業用水路としては問題ではないのですが、周りの人たちが掃除をし始め、汚い水を流さなくなりました。その結果、本当に透き通った水になったわけです。



こうなってくると、当然、行政が動き出します。今は、周りは人々が中に入れなくなっていますが、これは市長も考えて水に関与できるように、また水に親しめるように工事をし直す動きが出ました。

その結果、この自治会の後ろにある「まちづくり協議会」という小学校区のものがあるのですが、「私達もそういうことをさせて欲しい」ということになり、この地域組織、コミュニティが勢いづいてきました。

また、川の水の事だけではなく、他の事も始めたわけです。ということは、川の水がきれいになるだけではなく、その地域社会が大変豊かな社会、つまり人々がフェイス to フェイスでコミュニケーションできるようになりました。

このような現象が、日本の各地で現在おこり始めています。いま一番ありふれた方法は、子供達に理科の勉強のように学習させる「まじめ方法」です。

神戸市の都賀川でも基本的に同じ原理で、川の水がきれいになりました。ここは大都会の真ん中なのに、透き通った水が流れるようになりました。また当然、地域社会がたいへんしっかりしたものになりました。子供達は、それまでプールの水に入っていたのですが、自然の川の方が楽しいということで、川の方に目を向けるようになってきました。

先ほどの御所下水路は、今は御所川という名前に変わりました。これは、嘉田さんから「静脈(下水)まで考えて」というお話がありましたが、これは人間の体でいうと最末端です。その最末端の水がきれいになってくると、だんだんと大きい川の水、あるいは湖もきれいになっていくわけで、こんな簡単な方法で水がきれいになり、その地域社会が豊かになっているという現象が起きています。

処分権と利用権の逆転

それでは、3番目の所有の逆転についてお話したいと思います。所有という概念には、処分をする権利、つまり売ったり買ったり、形を変えたりするという権利と、利用する権利の2つから成り立っています。川の場合、所有という言葉は難しいのですが、行政が管理権を持っているので、それをとりあえず所有と考えるとします。

さて、先ほどの御所下水路の魚の例や神戸市の都賀川など、川がきれいになってきたのは、人々が利用したからです。コイも1つの利用、また都賀川も子供達を遊ばせるという形で利用しており、いずれにしても「利用」したわけです。ということは、地元の住民、コミュニティが利用権を持ってしまっているわけです。そのことに対して、行政は利用するなどは言いません。「利用することはいいことだ」ということで、利用権はおのずと自分達のものになりました。

すると、処分権をもつ側は、川を売ったり買ったりはできませんが、川の改築などを行うことができます。その時に、利用権を既にもってしまっている地元のコミュニティ組織に黙ってプランニングするという事は、今出した例の所では100%できなくなりました。下手をすれば、市長や町長の首が飛んでしまいます。もちろん、行政担当者もお互い努力し、利用が成立しコミュニティが充実していることもご存知なので、心から無茶なことはしようとは思いません。

つまり、利用権だけではなく、処分権にあたるものもコミュニティが持ち始めているのです。それを、私は「所有の逆転」と言っています。形式的には、川や湖の権利権は国や都道府県が持っているのですが、実質的には逆転現象が今起こりつつあります。

今、私たちが地域開発をしていこうとする時に、ハード、ソフトという言葉を使い、ハードでは様々な良い工夫をし、ソフトにも配慮し始めています。ソフトの中に含まれる社会組織を上部構造、下部構造に分けると、上部構造は、さまざまな人間関係や親しさ、価値観、文化が入り、下部構造には今申し上げたような所有に基づいた人間関係が含まれます。実はこの下部構造が逆転しつつあります。まちづくりを考える時に、この下部構造の現象に政策として焦点を定める、つまり、下部構造をまず逆転現象に持っていくことが必要なのだろうと思います。上部構造から政策を提出していても、どうもうまくいきません。下部構造をまず作っていき、逆転現象に生じる形をとりながら、上部構造に政策として打ち出していくということが、政策という面では一番いいのではないかと思います。